

今後の職業能力開発 「技術校生による授業評価の試行実施」

神奈川県技術校授業評価制度検討・試行グループ代表 商工労働部産業人材課* 吉田 玉緒

1. はじめに

最近の雇用情勢は緩やかに回復しつつあるものの、ここ数年は完全失業率が過去最高水準で推移していた。このような環境下で、公共職業訓練は1人でも多くの求職者を就職に結びつけるため、適切な人材ニーズの把握、それに応じた多様な訓練コースの設定、求職者の適性等に応じた訓練コースの選定、効果的な就職支援等を実施することが求められてきた。人材ニーズの把握や多様な訓練コース設置の必要性に疑問を呈するものではないが、職業訓練指導員にとっては、目の前にいる訓練生の就職がまずは切実な願いである。

1人でも多くの訓練生を就職に結びつけるため、今現在実施している訓練のさらなる効果向上を図るには、どうしたらよいのか。効率良く、より効果的な訓練を実施するには、どうしたらよいのか。

授業を受けている訓練生が「わかりにくい」「興味が持てない」と感じているのでは、授業の効果は期待薄である。指導員は良かれと思って行っている授業であるが、訓練生はどう受けとめているのか。

いずれも容易に解答が得られない課題であるが、それらの課題への取り組みの1つとして、今実施している授業がどうなのか、『訓練生本人に聞いてみる』ということが考えられる。

これが、本県が都道府県立の職業能力開発校では全国初となる「技術校生による授業評価制度」に取

り組んだ発端である。

なお、本県では県立の職業能力開発校を「高等職業技術校」と称し、県内に10校設置している（2005年度現在）。そして、これらの高等職業技術校に在籍する訓練生を「技術校生」と称している。技術校生の延べ在籍定員数は2005年度で1,240名である。また、指導員の上司として指導的立場にある職を「教務課長」、訓練科を「訓練コース」と称している。以下の記述では、これらの名称を用いる。

2. 試行実施の経緯

従来、訓練の内容について技術校生に意見を聞くということを行っていなかったわけではない。訓練中に行う試験の際に、授業の感想を聞くような授業アンケートを個人的に行っていた指導員はいた。しかし、組織的に実施していたわけではなかった。

また、主に修了生の就業実態について追跡調査を行う目的で、修了生実態調査を1980年度から毎年実施しており、その中に図1のような訓練内容に関する設問がある。

- 訓練内容について、お尋ねします。
1. 良かった
 2. 普通
 3. 改善の必要がある
- 「3. 改善の必要がある」と答えた方にお尋ねします。（複数可）
1. 基礎的なことを重視してほしい
 2. 応用的なことを重視してほしい
 3. 学科より実技を重視してほしい
 4. 実技よりも学科を重視してほしい
 5. 技術革新に対応した内容にしてほしい
 6. その他（ ）

図1 修了生実態調査の訓練内容に関する設問（一部）

*現在、神奈川県立産業技術短期大学校 情報技術科

このような設問が含まれているので、修了生実態調査の結果から、修了生の訓練に対する意見や感想を知ることができる。しかし、それは訓練全体に対するものであって、個々具体の授業に対する技術校生の意見は不明である。

そこで、指導員が行っている個々具体の授業に関して、技術校生の意見を聞き改善を図るための「技術校生による授業評価制度」について、2004年度に検討を開始した。検討の主体となったのは主管課である産業人材課であるが、指導員が訓練コースの再編等に関連する事項について検討を行う「再編調査検討会」（2005年度以降「職業能力開発調査研究会」と称している。）に意見を求め、産業人材課と再編調査検討会が連携して検討や試行を進めた。

詳しくは後述するが、2004年度に4校4コース、2005年度に全10校全35コースを対象に試行実施し、2006年度から本格的に実施する。

3. 神奈川方式単位制訓練の概要

授業評価制度については、訓練の実施状態を踏まえて検討する必要があるので、技術校生による授業評価制度の前に、本県独特の訓練体系について触れておく。

本県は1981年度から神奈川方式単位制訓練を実施している。これは、職業訓練の体系を、1つのラインで異なった機種を柔軟に生産できる多品種少量生産方式のようなフレキシブルなシステムにするために、教科課程を単位で構成するものである。必要に応じて単位を入れ替えることで、多様な訓練ニーズに対応した訓練を実現することを意図している。

単位は教科時間16時間および単位認定試験等の時間を含み、標準20時間で構成する。1日の訓練時間は8時間、水曜日は6時間とし、1時間は45分としている。総訓練時間は訓練期間6月で780時間、1年で1,560時間である。ちなみに、国基準は1時間が50分、総訓練時間が6月で700時間である。

原則として月～水曜日の3日間22時間で1単位、木～金曜日の2日間16時間で1単位とする。この際、水曜日は、月曜日からの単位の認定試験と前週末～

金曜日に実施した単位の認定試験を併せて実施する。これにより、1週間に2単位のペースで訓練を行う。

訓練期間6月で標準32単位、1年で標準64単位としており、総訓練時間のうち、規定の単位以外の時間は行事と課題演習に位置づけている。課題演習では補習を行うほか、単位習得が進んでいる技術校生には当初習得予定単位以外の単位の履修を可能としている。すなわち、訓練期間6月の訓練コースの標準的な技術校生は32単位の履修となるが、技能習得の早い者は課題演習の時間を活用することで33単位以上の履修が可能となる。

関連する単位をグループにまとめたものをラーニングパッケージと呼ぶ。

図2では訓練期間6月のエクステリア技術コースを例示した。入校後、「安全」「エクステリア施工基礎」から始めて「庭園作り」まで一連のラーニングパッケージによって職業に必要な技能を習得する。おのおののラーニングパッケージは、複数の単位から構成されており、例えば「ブロック・レンガ」のラーニングパッケージは「コンクリート・モルタル調合の仕方」等の単位から構成されている。

この神奈川方式単位制訓練によって、講義科目と実技科目を密接に関連させて訓練を行うことが可能となり、効果および効率の点で大きなメリットがある。

その一方で、図2に示すように、同じ曜日、同じ時間帯の授業でも教科が異なることとなり、指導員および時間講師のスケジュール調整、複数の訓練コースが利用する実習場所や機器設備のスケジュール調整等が複雑になっている。

4. 技術校生による授業評価制度の概要

技術校生による授業評価制度の実施方法について概要を述べる。

図2のエクステリア技術コースの教科課程を構成する10個のラーニングパッケージのそれぞれは、関連する単位から構成されており、「ひとまとまりの訓練」として扱うことができる。

このひとまとまりの訓練に対して、その開始時ま

例：エクステリア技術コース（6月）

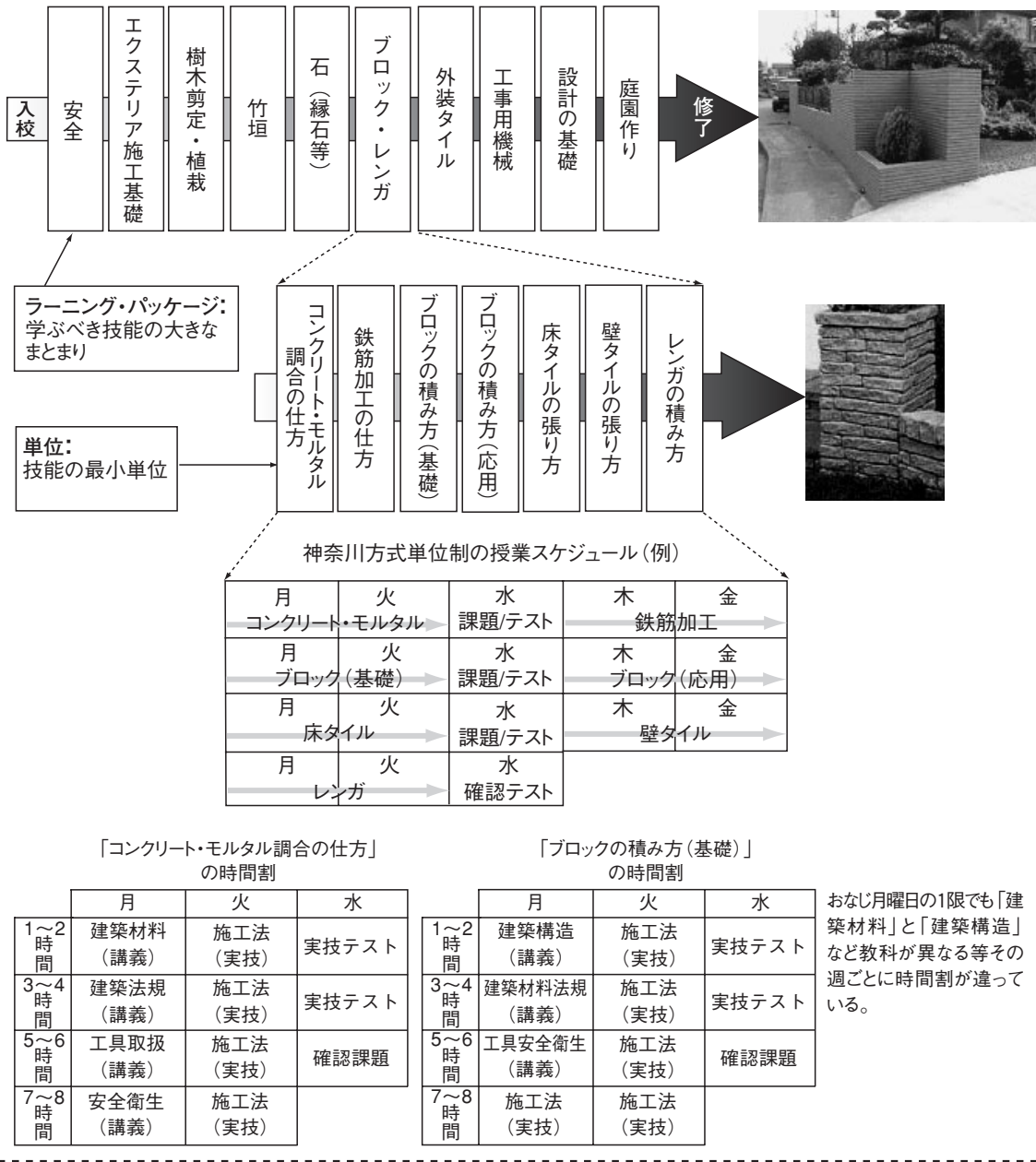


図2 神奈川方式単位制訓練の授業スケジュール

で授業計画表(シラバス)を技術校生に配布し、これから行う授業の目的や予定内容等をあらかじめ技術校生に知らせることにより、技術校生に授業に臨む準備(予習等)を整えさせるとともに、技術校生が授業のねらいを把握したうえで授業を受けることによって、授業の効果向上を図る(図3の①)。授業計画表(シラバス)の様式を図4に示す。図4でLP名とあるのは、ラーニングパッケージの名称であ

る。授業目的、到達水準、訓練内容、成績評価の方法等について記述する。

ひとまとまりの訓練の終了時に授業評価アンケートを実施する(図3の②)。授業評価アンケートの設問を表1に示す。

授業評価アンケート用紙(部分)を図5に示す。無記名とし、表1の設問に対して、1～5の5段階数値評価で回答する。授業評価アンケート用紙には

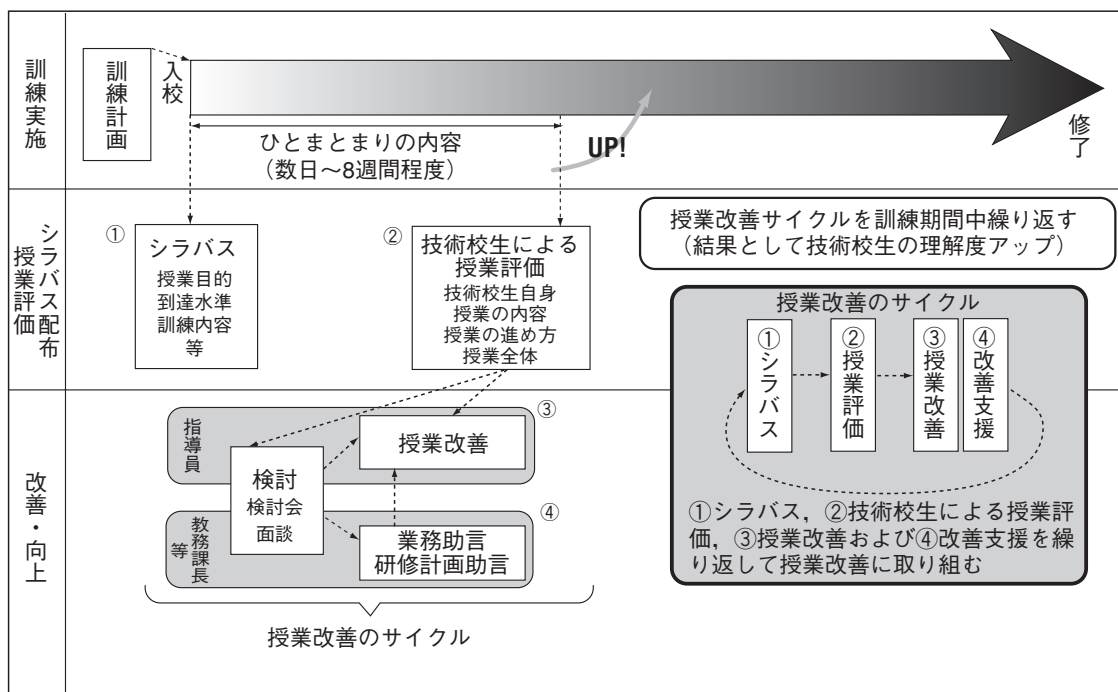


図3 授業改善のシステムのイメージ

表1 授業評価アンケートの設問（2005年度）

番号	設問グループ	設問内容
1	技術校生自身について	あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか
2		あなたはこの授業に関して、予習・復習を十分に行いましたか
3	授業の内容について	授業の目的は明確でしたか
4		授業の内容に興味を持つことができましたか
5		授業の内容はわかりやすかったですか
6	授業の進め方について	授業担当者の話し方は明確で聞き取りやすかったですか
7		補助教材・資料は授業の理解を助けるように工夫されていたと思いますか
8		授業担当者は技術校生が質問したり、意見を述べたりできるような配慮をしていましたか
9	授業全体について	この授業は全体として満足できるものでしたか
10 以降	追加	(授業担当者からの追加質問)

表1に示す設問グループごとに自由記述欄を設けている。授業担当者からの追加質問がなければ、設問数は9であり、A4版片面に印刷できる。追加質問があった場合は、裏面に印刷する。

高等職業技術校では光学式マーク読取装置が整備されていないため、Excelシートに授業評価アンケートの回答値を入力すると自動的に集計を行うExcelファイルを各校に配布した。データ入力者は教務課長、授業担当指導員等である。技術校生の自由記述欄の

意見が多い、データ入力を行う職員がパソコン操作に不慣れである等の場合、このデータ入力作業に長時間を要するので、入力作業の負荷軽減が課題として指摘された。

この後、授業を担当した指導員が授業評価の結果を検討し、必要に応じて授業改善を行う(図3の③)。具体的な授業改善例には、「説明の声が聞き取りにくいようなので、今後はマイクを使用する」等の改善が容易なものから、「複数の時間講師で分担した授業

授業計画表 (シラバス)

LP名	障害・疾病の理解のしかた			
授業目的	老化や障害・疾病の特性, 病気・感染症の予防と対処法, 要介護状態にある高齢者への健康チェックのしかたを習得する。			
到達水準	高齢者・障害者の健康チェックができる。			
日程	単位名	訓練内容 (番号は使用テキスト:()は対応ページ)		担当講師
4月18日	障害・疾病の理解のしかた	1・2時間	健康チェック	1 (P113~P124), 2, 3 (P1~4)
		3・4時間	バイタルチェック実技	2 (P5~6)
		5・6時間	老化と高齢者の理解	1 (P125~P128), 2, 3 (P7~16)
		7・8時間	老化と高齢者の理解	
(略)				
4月20日	課題	1・2時間	健康チェック実技	
		3・4時間	ペーパーテスト	
使用テキスト	1: ホームヘルパー講座2級課程テキスト・1巻 2: スキルアップテキスト1 3: 講師作成の補助テキスト「障害・疾病の理解のしかた」			
単位認定方法	4月20日(水)にペーパーテスト・実技テストを行います。 実技テスト項目 体温(腋下での測定, 電子体温計使用), 脈拍・呼吸, 血圧測定(上腕動脈での測定, 水銀式血圧計・聴診器使用) 実技テスト評価 バイタルチェック評価基準による ペーパーテスト 老化・障害・疾病の特性, 病気・感染症の予防と対処法 要介護状態の高齢者等への健康チェックのしかたについて問う内容です。			

※授業計画表(シラバス)とは, これからの授業の目的や予定している内容等をあらかじめ技術校生のみなさんに知ってもらうことで, みなさんが授業に臨む準備(予習等)を整えるとともに, みなさんが授業のねらいを把握した上で授業に臨むことによって, 授業の効果向上を図るためのものです。

図4 授業計画表(シラバス)(一部省略)

(第2号様式)

授業評価アンケート用紙(手集計版)

この授業評価アンケートは, 技術校生のみなさんから授業に対する意見や希望を聞くことで, 授業の内容を向上させていくことを目的に行うものです。率直な意見を聞かせてください。

番号	設問内容	回答(1~5のいずれかに○して下さい)
■最初に, あなた自身のことについて回答してください。		
1	あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	1 2 3 4 5
2	あなたはこの授業に関して, 予習・復習を十分に行いましたか	1 2 3 4 5
自由記述		
■授業の内容について回答してください。		
3	授業の目的は明確でしたか	1 2 3 4 5

図5 授業アンケート用紙(部分)

の内容から訓練計画まで含めて, 教科課程を改めて検討したい」等の大掛かりなものまでが含まれている。

図3では, この授業改善と並んで, 教務課長等により改善支援を行うこととしている(図3の④)。授

業を改善する直接の担当者は, 授業を担当している指導員であるが, 授業改善に関しては指導員だけが努力すればよいというものではない。校として, より良い訓練を技術校生に提供していくために, 指導

員の上司である教務課長は指導員の改善努力を支援し、業務や研修計画に対する助言等の指導を行う。

教務課長等による改善支援については、現時点では具体的な実施方法は定めていない。必要に応じて校内検討会等を行うことを想定している。

以上の①授業計画表（シラバス）配布②授業評価アンケート実施③授業改善④改善支援を「授業改善のサイクル」として、訓練期間全体にわたって、ひとまとまりの訓練ごとに繰り返す。これにより、改善を翌年度に持ち越すのではなく、今年度の訓練をリアルタイムに改善しながら、訓練の質の向上を図るものである。

5. 2004年度試行実施

技術校生による授業評価の検討を2004年度に開始したが、最初から前項に述べたように実施方法が決まっていたわけではない。評価後の改善についても「曖昧にしないためには、例えば『回答の平均値が3.0を割ったら授業方法の変更を検討する』等、ある程度強硬にすべきだ」という意見がある一方で、「そんなことをしたら『被告扱い』されてしまう」という意見もあった。すべての事柄を試行錯誤しながら決めていったのが実状である。

産業人材課では、具体的な実施方法について、前述の再編調査検討会とともに7～9月に検討する一方、高等職業技術校の校長で構成する校長会、同じく教務課長で構成する教務課長会で意見を求め、指導員向けの説明会も開催した。

実施方法を定めるためには、実施して結果を見る必要があるため、試行に取り組むこととした。2004年度は、10月から訓練を開始する短期課程6月後期の訓練コースを中心に、表2に示す4校4コースが2004年10月～2005年3月の期間内に試行に取り組んだ。実施内容は図3の①授業計画表（シラバス）配布②授業評価アンケート実施③授業改善までとし、④改善支援については教務課長等による校内検討会を可能であれば試みることにした。

2004年度試行では、鶴見高等職業技術校ビルメンテナンスコースおよび横須賀高等職業技術校CAD製

表2 2004年度試行実施

校	訓練コース	定員
鶴見高等職業技術校	ビルメンテナンスコース (短期6月)	30名
紅葉ヶ丘高等職業技術校	介護・ビジネスコース (短期6月)	40名
川崎高等職業技術校	機械設計製図コース (普通1年機械製図科)	20名
横須賀高等職業技術校	CAD製図コース (短期6月)	20名

図コースがそれぞれ全32単位中31単位、川崎高等職業技術校機械設計製図コースが全64単位中20単位、紅葉ヶ丘高等職業技術校介護・ビジネスコースが全32単位中3単位で授業評価を実施した。

6. 2005年度試行実施

2005年度には試行対象を拡大し、全10校全35コース（技術校生延べ定員1,240名）で試行に取り組んだ。授業評価の総実施回数（産業人材課報告分）は2006年2月28日時点で800回である。

日本版デュアルシステムである平塚高等職業技術校金属加工コースでは、施設内訓練を対象として実施した。企業実習等も訓練の一部ではあるが、一般の授業とは扱い方が異なるので対象外とした。他の訓練コースにおいても、インターンシップ、企業実習等は授業評価対象外とした。

実施内容は、2004年度同様、図3の①授業計画表（シラバス）配布②授業評価アンケート実施③授業改善までとし、④改善支援については教務課長等による校内検討会を可能であれば試みることにした。

2005年度は、2006年度本格実施に備えるために、技術校生による授業評価制度の具体的実施方法について検討することとした。このために、次に述べる授業評価開発委員会を設置し、「授業評価・改善の手引き」を作成した。

7. 授業評価開発委員会

2006年度からの本格実施に向けて円滑な実施方法を検討することを目的として、授業評価開発委員会を設置した。委員会では、試行実施結果に基づいて

表3 授業評価開発委員会の委員の構成

区分	氏名	役職
研究者	林 義樹	横浜国立大学大学教育総合センター教授
学識経験者 (審議会委員)	石井 裕士	神奈川新聞社経営管理局長
認定訓練校 (審議会委員)	本島 克己	日産テクニカルカレッジ校長
雇用・能力開発 機構	竹井 三士	関東職業能力開発促進センター所長
産業人材課計画調整担当課長代理および2004年度試行校教務課長等4名		

授業評価制度の具体的実施方法、あり方等についての検討を行った。委員の構成は表3のとおりである。

委員会は2005年5月24日、7月29日、10月13日、2006年1月25日の計4回開催した。

検討結果を「授業評価・改善の手引き」にまとめ、本県の職業能力開発施設に勤務する指導員全員に配布した。指導員が授業評価・改善に際して参照しながら使っていけるものになったと考えている。授業の改善というものは、「こうすればよい」という具合に実施方法が決まっているものではないため、参考事例を豊富に入れた。この手引きは神奈川県職業能力開発審議会の委員に送付し、関係機関にも参考送付している。

8. 試行における検討事項

2004年度および2005年度の試行における主な検討事項としては、以下があげられる。

- 授業計画表（シラバス）の様式
- 授業評価アンケート用紙の様式
- 技術校生の回答の負荷軽減

これらについて以下に詳述する。

8.1 授業計画表（シラバス）の様式

2004年度試行では、授業計画表（シラバス）の様式を特に定めず、授業の目的、到達水準、訓練内容、成績評価等について記載するようにした結果、多様な様式が存在することとなった。授業計画表（シラバス）は、技術校生に授業に臨む態勢を作らせるという本来の目的のほかに、訓練内容を入校希望者等

の一般の方々に説明する際にも活用できることから、様式を統一することが求められた。

訓練の内容をあらかじめ技術校生に周知することによって授業に臨む態勢を作らせるという目的のためには、授業計画表（シラバス）に記載する訓練内容は詳しいほうが望ましい。

その一方で、試行に協力してくれた指導員から、訓練内容の記載は概括的なほうが望ましいという意見が多く寄せられた。その主なものは、技術校生によって学習の習熟度が異なるというものである。このため、訓練内容を日単位あるいは時間単位で明確に定めることが困難だということ、技術校生から「自分ができないのは授業が悪いからだ」「自分は予定より遅れているので、この単位を落としてしまうのではないか」等といった反発や動揺を招く恐れがあるということである。

訓練効果向上のためには、指導員が授業を工夫するだけでなく、技術校生自身が主体的、能動的に学習に取り組む必要がある。2005年度に、授業計画表（シラバス）の改善による技術校生の予習促進について、授業評価アンケートで技術校生の声を聞きながら検討した校があった。図4に示した現在の授業計画表（シラバス）は、その提案を受けて決めたものである。テキストが複数ある場合は通番を振り、訓練内容にテキストの該当ページを記載する欄を設けることにより、技術校生からも「テキストの該当ページをはっきり指示してもらえるようになって、とてもよいです。くわしくて、わかりやすいと思いました」と好評であった。

8.2 授業評価アンケートの様式

高等学校や大学の授業と異なり、高等職業技術校の授業では同一の授業を複数の指導員で担当することが多くある。実技では、10名程度の班に1名の指導員がつく。

授業評価アンケートは、授業に対する評価であることから、2004年度はひとまとまりの訓練に対して1枚の授業評価アンケート用紙としていた。表1の番号6～8のような指導員別に複数の回答がある設問に関しては、1枚のアンケート用紙の中に回答欄

を指導員の人数分設けていた。

しかし、この方式では1つの設問に複数の回答があることから、技術校生が回答を混同することがあり、2005年度以降、授業評価アンケートは指導員1人に対して1枚とした。

指導員個人単位で評価を行うことにより、技術校生にとって回答を混同しにくく、指導員にとっても改善に生かしやすいものとなった。その一方で、個人単位で評価すると人事評価に流用されやすくなるという反対意見があった。

授業評価は訓練の質を向上させるために実施している。よい授業を行っている指導員が高い評価を受けるべきであるが、授業評価を人事評価に活用するならば技術校生による授業評価だけではなく、もっと多面的な評価を行うべきである。このことから、技術校生による授業評価の結果を人事評価に流用することは今後もないと考えている。

また、授業評価アンケートの様式については、評価結果のデータ入力作業の負荷軽減が求められていることから、手集計版とマークシート版の2種類を用意することとし、光学式マーク読取ソフトを購入した。これにより、ドキュメント・スキャナのある校ではマークシート処理が可能になった。

8.3 技術校生の回答の負荷軽減

表1に授業評価アンケートの設問を示したが、試行開始当初はもっと多く、16問あった。試行に協力

表4 削除した設問

番号	設問内容
1	授業の内容は系統的に構成されていましたか
2	授業の内容はシラバスに沿っていたと思いますか
3	授業の進度および毎回の授業における時間配分は適切であったと思いますか
4	授業内容はあなたが就職した後に役に立つと思いませんか
5	授業担当者はよく準備し、理解させる努力をしていたと思いますか
6	授業担当者は1人ひとりの技術校生に対して公平に接していましたか
7	この授業で新しい知識、技術、技能を獲得することができたと思いますか

してくれた指導員から、設問数が多く技術校生にとって回答が過負荷であり、「まだあるのか」「またアンケートか」といった声が聞かれるため、設問数を減らしたほうがよいという意見が寄せられた。

そこで、他の設問への回答から推測できるもの、指導員が授業評価結果を検討する際に自己評価的に検討したほうがよいもの等は削除することとした。このことにより削除した設問を表4に示す。

9. 授業評価・改善による成果

2004年度および2005年度の試行実施に協力してくれた指導員は、技術校生による授業評価制度について検討するとともに、自らの授業について検討・改善をも行った。各校指導員の授業改善のための取り組みおよび感想等について表5に示す。

企業の技術革新に合わせて、訓練内容を常に見直す必要があるため、技術校が求人企業の現場の様子や要望を把握することは重要である。授業評価開発委員会で、授業計画表（シラバス）には訓練内容が提示順や時間数も含めて記載されているので、これを求人企業に提示して意見を求めることが提案された。そこで、いくつかの訓練コースにおいて、授業

表5 試行での授業改善の取り組み等

- 授業の目標や到達水準をあらかじめ明示することにより、技術校生は「何ができるようになればよいのか」が明確に理解でき、授業に活気が出て単位認定試験の成績も向上した。
- 授業評価結果を受けて、座学主体の授業にグループワーク（班活動で議論・発表等）の要素を盛り込む等、授業運営の方法やペース配分を工夫した。
- グループワークの効果が確認された。今後も続けていきたい。
- 技術校生が企画進行する参加型授業を工夫し効果を得られた。人前に出ることに抵抗がある技術校生には、無理強いすることなく、より積極性を発揮できるように指導していきたい。
- 指導員の授業改善の努力が伝わっているようで、技術校生の反応が良くなった。
- イラストやカラー印刷を多用し、作業の様子がわかりやすい教科書に変更した。
- 単位認定試験のほかに、技術校生の状態を把握できた。

表6 企業から得た意見等（一部）

- 1年コースにしては、幅広い教科を実施している。
- 大学でも2～3年次に実施するような教科を1年目に実施している。
- 仕事力は、知識量で決まるのではなく、やる気や手法によって差が出るので、こちらを鍛えたほうがよいのではないか。

計画表（シラバス）をもとに訓練内容を紹介する資料を作成し、企業に意見を求めた。

得られた意見等の一部を表6に示す。今回は訓練内容の改善に直接結びつくような意見等は得られなかったが、授業計画表（シラバス）の活用は有効と考えられる。

10. 今後の課題

技術校生による授業評価に取り組み始めて2年近くが経つ。手探りの状態から始めて、数多の試行錯誤の末によりやく実施方法の形が整ってきたが、まだ多くの課題がある。

2004年度試行において、技術校生の回答の負荷を軽減するために設問数を減じた。2005年度試行においても、指導員から「授業評価の回数を重ねると技術校生が飽きてくるので、新鮮なうちに終了するよう授業評価の回数を減じたほうがよい」という意見が寄せられている。しかし、簡単に実施回数を減らすことはできない。訓練期間中に実施する授業評価の間隔が短ければ、より早く改善を訓練に反映させることができるが、間隔が長いと「気づいたときには、もう終わっていた」ということになりかねないからである。

そこで、従来の授業評価とは別に簡易な授業評価について検討したい。授業評価の実施間隔は長めに設定し、その区切りで従来どおりの授業評価を実施し、それとは別に短い間隔で簡易な授業評価を実施すれば、改善のタイミングを逃すことなく技術校生の回答の負荷を軽減できるのではないかと考えている。

この簡易な授業評価については実施を試みたが、現時点で導入には至らなかった。

また、授業評価アンケートの設問についてもさまざまな意見等が寄せられており、その検討も含めて今後の課題と考えている。

技術校生が授業評価に飽きるという意見があったが、授業評価の成果を技術校生自身が実感できれば、飽きにくくなると思われる。そのためには、授業評価結果を技術校生へフィードバックする必要がある。授業評価は指導員と技術校生との双方向のコミュニケーションツールである。「自分の意見が先生に認められた」と思えば技術校生の側もやる気が出てくる。

改善支援については校内検討会の実施事例が少なく、これも今後の課題と考えている。

授業評価は、訓練の質を向上させるために技術校生の声に耳を傾けてみようという、ある意味で非常に素朴なところから出発した。当初、目指したのは授業改善であるが、今では、自分で考え判断し行動できる人材の育成という大きな課題を解決する一端を担えるのではないかと考えている。

技術校生を評論家的な立場に置くのではなく、指導員と技術校生が協力して授業を作り上げるという意識を持つことにより、その端緒が開けることを希求している。

<謝辞>

本制度の立ち上げから共に検討し、試行に協力くださった技術校授業評価制度検討・試行グループおよび各高等職業技術校の職員の皆さま、手探り状態の授業評価に協力し、忌憚のない意見を聞かせてくれた技術校生諸君に深く感謝致します。